

物語を読む際に喚起される イメージの視点と文章の視点の関係

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 福田 由紀

筑波大学心理学系 福沢 周亮

The relationship between "point-of-view in image" and "point-of-view in sentence" in narratives.

Yuki Fukuda and Shusuke Fukuzawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this paper is to examine the relationship between "point-of-view in image", and "point-of-view in sentence", and to investigate the constancy of individuals in taking point-of-view in image. Ninety-one undergraduate and graduate students were assigned three conditions. They read a story containing by 6 scenes and drew visual images about 6 target sentences which were underlined to let subjects draw their own image. Three conditions were as follows; in the correspondence condition, point-of-view in sentence of the target sentence corresponded with those of the two sentences before the target sentence; in the un-correspondence condition, they did not correspond; in the implicit condition, explicit point-of-view in sentence was not included in the target sentence. The result showed that the way of taking point-of-view in image was affected by point-of-view in context which has been taken before the target sentence more than the point-of-view in the target sentence. Also it suggested that individual pattern of taking point-of-view in image were classified as to type of changing point-of-view along context, type of fixing point-of-view on one character, type of fixing point-of-view on the third person, and type of no constancy about taking point-of-view.

Key words : point-of-view, image, sentence, context, narrative.

問 題

物語を読む際に、我々がその物語の登場人物などを頭の中に思い浮かべることはよく知られている。また、その視覚的イメージは写真のように静止しているわけではなく、映画のように連続的に登場人物が動き回ることも多いといわれている。そのような視覚的イメージを生成する上でなくてはならない原点がイメージの視点である。

では、イメージの視点と文章の視点はどのようなものであるか。イメージの視点とは、視覚的イメージに存在し、対象とその観察者が存在すると仮想する空間におけるその観察者の位置と考えられている(福田, 印刷中)。一方、文章の視点は、文章中に明

示的に含まれる場合と潜在的に含まれる場合がある。往来動詞や授受動詞などは明示的な視点表現である。例えば、言語学的には「行く」の文では行動主体に、「来る」の文では目的地に視点が置かれているといわれている。この2つの視点の間の関係は、これまでの研究では明らかになっていない。

イメージの視点と文章の視点の関係という観点から今までの研究を分類すると、大きく3つの研究の流れがある。

一つは、イメージの視点のみについての研究である。これは、Piagetの「3つ山問題」に端を発し、Light (1983) により視覚的視点取得課題 (visual perspective taking task)、無藤・久保 (1982) により他者の視覚についての知識の研究と呼ばれる一連

の研究である。Flavell (1978) は、3つ山問題を解決するために、次の2つの水準の知識を獲得することが必要であるとした。第1水準は、他者には何が見えて何が見えないのか、第2水準は他者にはどのようにそれが見えるのかである。Masangkay, McCluskey, McIntyre, Sims-Knight, Vaughn, & Flavell (1974) は、その2つの水準の妥当性と順序性を確認した。

3つ山問題に影響する要因として、Borke (1975) は刺激の熟知性が課題の難易に影響していることを示唆した。また、人形を使用した教示よりも実際の人間をモデルとした教示の方が課題が易くなる (Fishbein, Lewis & Keiffer, 1979) という知見もある。

3つ山問題を解決するための能力を下位分類し、その各下位能力について検討する研究も多く行われている。例えば、渡辺 (1984) は、3つ山問題解決と深い関わりを持つと考えられる6つの下位能力を取り上げ、それらの有無が問題解決にどのような影響を持つかを発達的に明らかにした。また、天野 (1980) は3つ山問題に関係している下位能力を訓練することによって空間操作能力の発達への影響を明らかにした。また、中塚 (1979) は、視点転換課題が困難な児童に様々な訓練を施し、その中で具体的な空間移動課題の後に変換ルールを言語化するという訓練を行うことによって3つ山問題解決の効果をあげた。このように、イメージの視点のみについての研究は、空間操作能力の発達、影響する要因、下位能力についての研究などを通して知見が蓄積されている。

第2の研究は、文章の視点のみについての研究である。言語学的研究の中で、久野 (1978) は視点を共感度という指標で捉えている。共感度とは、「文中の名詞句のx指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感と呼び、その度合、すなわち共感度をE(x)で表す。共感度は値0 (客観的描写) から値1 (完全な同一視化) までの連続体である」と定義されている。この共感度とカメラ・アングルの一貫性などの仮説的法則を用い、様々な言語現象を説明している。また、山田 (1985) は、久野の共感論を補う形でベース論を展開し、安井 (1976) はダイクシス再編成という観点を視点論に持ち込んでいる。

心理学的研究の中では、視点が一貫している文章を読む方が、一貫していない文章を読む場合よりも、読む時間は短く、理解し易く、再生に誤りが少ないことが明らかとなっている (Black, Turner & Bower, 1979)。また、Black et al. は、文章の添削を被験者に行わせた場合、視点が一貫している文章よりも、一貫していない文章の方が添削される回数

が多いことを示した。また、その添削の内容は、視点が一貫していない動詞を、一貫している動詞や視点に関して中性的な動詞に書き直したものであった。

発達的にみると、明示的視点表現である往来動詞の「行く」は「来る」よりも獲得が早い (久慈・斉藤, 1983) ことがわかっている。また、石黒 (1985) は授受動詞 (あげる, もらう, くれる) が使用されている文の理解において、起点格かつ動作主格に視点が置かれ、それらの次に終点格がくるという文が、そうでない文よりも理解され易いことを見つけた。このように文章の視点のみについての研究は、言語学や心理学の両方からアプローチされている。

もう一つの研究の流れは、両視点を明確な区別をせずに扱っている研究である。鈴木 (1981a, 1981b, 1982) は、一連の研究のなかで、往来動詞を含んでいる文と、その文の内容を表している絵を課題として用いた。文章が絵の内容と一致しているか否かを判断する課題では、2年生でも自分の視点と対立している人物の視点にたつて文を判断できた。しかし、絵を見て文章を作り出す課題では6年生になるまで産出は困難であった。宮崎 (1985) は文学作品の情景や心情理解をする際に、読み手の視点活動が重要な役割を果たすことを示唆している。福田 (印刷中) は、読み手の視点と文章の視点に注目し、仮想的世界におけるイメージの視点を変換する能力の発達段階を明らかにした。そして、その視点を変換する能力と視点表現を含んだ文章の理解度に相関関係があることを見いだした。これら鈴木や福田の研究の中で使用された「被験者自身の視点」や「読み手の視点」という用語は「イメージの視点」を指し、「視点表現を含んだ文章」は「文章の視点」を表している。

以上のように、これまでの研究はイメージの視点と文章の視点を明確に区別していないが、その両者の視点の存在を示唆している。そこで、本研究では、物語を読む際に喚起されるイメージの視点と文章の視点の関係を明らかにする。その際、往来動詞を含む文章のみに限定する。また、被験者に視覚的イメージを喚起させる時、どのような視覚的イメージが喚起されるのかを予測することは難しいので、実験者側で被験者の反応を統制することが困難である。よって、心的イメージをなるべくそのまま外在化するために、被験者に自分のイメージを絵に描かせるという方法をとる。また、喚起されるイメージの視点の個人内の一貫性についても検討する。

Table 1 条件別ターゲット文の具体例

	一致条件	不一致条件	潜在条件	登場人物
シーン1	玄太が両手にヤマバトをぶらさげて家の中に入って行きました。	玄太が両手にヤマバトをぶらさげて家の中に入って来ました。	玄太が両手にヤマバトをぶらさげて家の中に入りました。	玄太—一郎
シーン2	その途端に、山んばが家の中に入って来ました。	その途端に、山んばが家の中に入って行きました。	その途端に、山んばが家の中に入りました。	玄太—山んば
シーン3	山んばが酒樽の方へ近づいて行きました。	山んばが酒樽の方へ近づいて来ました。	山んばが酒樽の方へ近づきました。	山んば—一郎
シーン4	玄太は不思議なきのこの味噌汁のなべを山んばのいる囲炉裏端に運んで来ました。	玄太は不思議なきのこの味噌汁のなべを山んばのいる囲炉裏端に運んで行きました。	玄太は不思議なきのこの味噌汁のなべを山んばのいる囲炉裏端に運びました。	山んば—玄太
シーン5	一郎が樽の後ろから出て来ました。	一郎が樽の後ろから出て行きました。	一郎が樽の後ろから出ました。	玄太—一郎
シーン6	一郎はそっと山んばに近づいて行きました。	一郎はそっと山んばに近づいて来ました。	一郎はそっと山んばに近づきました。	一郎—山んば

方 法

被験者 大学生，大学院生計90名。

材 料 筆者が6シーン構成の物語を作成した。登場人物は，少年「一郎」「玄太」と鬼女「山んば」の3人である。その粗筋は，山に迷った「一郎」が「山んば」の家にたどり着き，そこで下働きとして働いていた「玄太」と協力して山んばを退治し，無事に村に帰るという話である。

条 件 次の3つの条件を設定した。各条件ともターゲット文（被験者に視覚的イメージを喚起させ，その絵を描かせる文）だけが異なり，他の内容は全く同じである。また，ターゲット文は各シーン1文ずつ用意された（Table 1）。

一致条件では，ターゲット文の前の2文がターゲット文と同じ文章の視点から書かれている材料を使用した。例えば，シーン1では，「～，玄太は外に出ました。玄太はそこから特に大きいヤマバトを2羽取りました。玄太が両手にヤマバトをぶらさげて家の中に入って行きました。（下線部がターゲット文）」である。不一致条件では，ターゲット文の前の2文が，ターゲット文と異なった文章の視点から書かれている材料を使用した。潜在条件では，ターゲット文に明示的な視点を示す動詞が含まれていない材料を使用した。

手続き 視点一致条件，視点不一致条件，潜在条件の3条件に，被験者を各30名ずつ無作為に振り分けた。

最初に，被験者に登場人物の全身像の例を紙面上で与えた。物語を読ませ，ターゲット文についての視覚的イメージを絵に描かせた。絵を描くときは，線だけで構成された略画でもよいことを強調し，絵

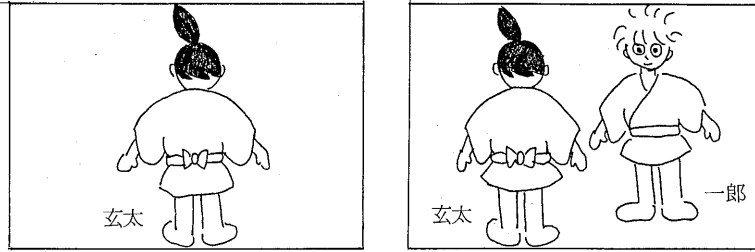
内の人物名とその人物の顔の方向を明らかにすることを教示した。また，最初のイメージを被験者に描かせるために物語を読み返さないことと，頭の中に絵のようなものを思い浮かべながら物語を読むことも教示した。実験実施時間は，最も早い被験者で15分，遅い被験者で25分であった。

結果と考察

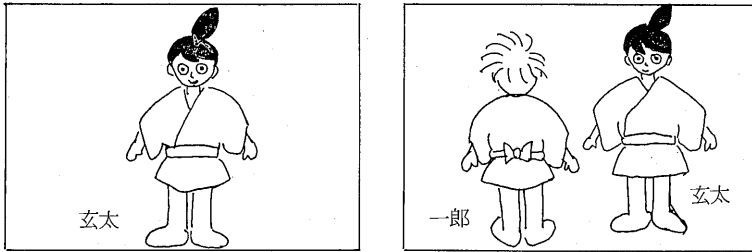
イメージの視点という観点からの絵の分類 描かれた絵の登場人物の数が，各シーン，被験者ごとに異なっていた。そこで，ターゲット文中の主格の登場人物と，その文に明示的には書かれていないが，主格の登場人物と対峙している登場人物の2人の関係に限定して分析した。この主格との対峙が暗に示唆されている登場人物は，主格の登場人物1人だけが描かれている場合を除き，すべての被験者の絵に描かれていた。シーン別の登場人物の取り上げ方は，Table 1に示した。イメージの視点がどの登場人物寄りにとられているかを検討するために，次のような基準で被験者の絵をシーンごとに分類した。それは，2人の登場人物の顔の角度が前向き，後向き，横向きであるかと登場人物の相対的位置関係（どの登場人物が一番手前にいるか）である。例えば，被験者が描いた第1シーンについての絵はFig. 1のような6つのプロトタイプに分類された。

これら6つの絵に振り分けられた被験者の割合を各シーンごとに，Table 2に示した。一致条件における被験者の割合は92%，不一致条件は93%，潜在条件は84%であった。全体的にみると，約90%の被験者の反応が6つに分けられた。以下では，イメージの視点がどこに位置するかを明らかに特定できる6

a. 対応反応



b. 非対応反応



c. 中立反応

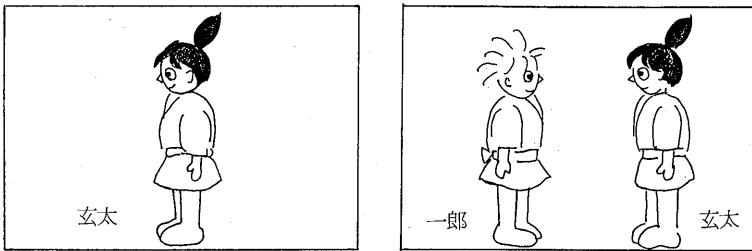


Fig. 1 第一シーンにおける絵の分類例。

Table 2 6つの分類に振り分けられた被験者の割合

	シーン1	シーン2	シーン3	シーン4	シーン5	シーン6	全 体
一致条件	87%	87	97	90	97	93	92
不一致条件	97	90	93	87	93	100	93
潜在条件	73	77	93	83	81	97	84

つの分類に振り分けられた反応のみを分析の対象とする。

イメージの視点と文章の視点の関係 ターゲット文の文章の視点は、一致条件と不一致条件のみにおいて明示的である。潜在条件においては、ターゲット文の文章の視点は明確でない。そこで、イメージの視点と文章の視点の関係を明らかにするために、一致条件と不一致条件における被験者によって描かれた絵のみを最初に取り上げ、次のような分類を行った。それは「イメージの視点とターゲット文の

文章の視点の位置が一致しているか否か」という点に注目して、6種類の絵を、対応・非対応・中立という3つの反応に次のように分類した。

対応反応とは、イメージの視点と文章の視点と同じ登場人物寄りにある反応とした。非対応反応とは、イメージの視点と文章の視点が異なった登場人物寄りにある反応とした。中立反応とは、文章の視点に関わりなく、イメージの視点が第三者的な視点であり、2人の登場人物について等距離から2人を見ている位置にある反応とした。例えば、一致条件にお

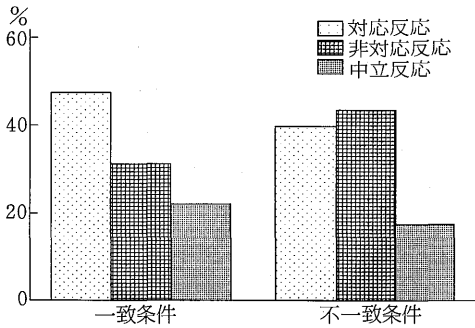


Fig. 2 一致・不一致条件における反応の割合

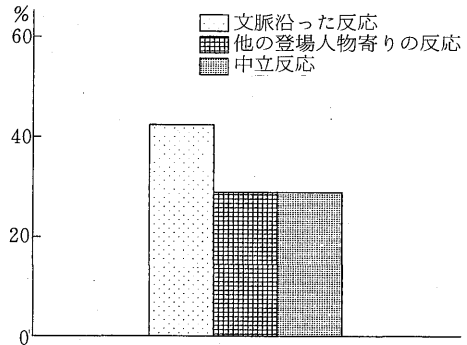


Fig. 3 潜在条件における反応の割合。

ける第1シーンの文「玄太が両手にヤマバトをぶらさげて家の中に入って行きました。」の文章の視点は玄太に置かれている。この文に対して、玄太が後向きで描かれている絵を、玄太寄りにイメージの視点があると考え、対応反応とした (Fig. 1a)。逆に玄太が前向きで描かれている絵を、そのイメージの視点は相手役である一郎寄りにあると考え、非対応反応とした (Fig. 1b)。また、玄太や一郎が横向きに描かれている絵を、そのイメージの視点は第三者にあると考え、中立反応とした (Fig. 1c)。

全シーン合計の3反応の頻度の割合をFig. 2に示した。一致条件における対応反応の頻度は78, 非対応反応の頻度は51, 中立反応の頻度は36であった。一方、不一致条件における対応反応の頻度は66, 非対応反応の頻度は72, 中立反応の頻度は29であった。これについて、対数・線形モデルの当てはめによる検定 (弓野, 1981) を行った結果、対応・非対応反応は有意に多く、中立反応は有意に少ないことがわかった ($\hat{a} = .32, SE = .08, p < .01$; $\hat{a} = .15, SE = .08, p < .10$; $\hat{a} = -.48, SE = .09, p < .01$)。また、非対応反応と一致・不一致条件の各交互作用に有意な差が認められた ($\hat{a} = -.18, SE = .08, p < .05$; $\hat{a} = .18, SE = .08, p < .05$)。これらは、一致・不一致条件では全体的に中立反応が少ないことを示している。また、一致条件では非対応反応が有意に少なく、不一致条件では非対応反応が有意に多いことも示している。例えば、次のような反応が多かった。シーン5のターゲット文「一郎が櫓の後ろから出て来ました」の文章の視点は、玄太寄りに置かれている。一致条件において、イメージの視点が、文章の視点が置かれていない登場人物(一郎)寄りにとられることは有意に少なかった。一方、不一致条件では文章の視点が置かれていない登場人物(玄太)寄りにとられることが有意に

多かった。

一致条件と不一致条件の違いは、ターゲット文の前の2文がターゲット文の文章の視点と同じ登場人物寄りの文章の視点であるか否かである。これらを考え合わせると、イメージの視点はターゲット文自体の文章の視点による影響よりも、ターゲット文に至るまでの連続的なイメージの流れを規定している視点によって、より大きな影響を受けることが示唆された。これは、ターゲット文一文の文章の視点に対して、「文脈の視点」といえるだろう。もし、この文脈の視点だけがイメージの視点に影響するならば、対応反応と一致・不一致条件の交互作用に有意差が認められるはずだが、今回の実験で有意差は認められなかった。それには、ターゲット文それ自体の文章の視点の影響、シーン設定が家の中と外といった2つの空間にまたがっていること、ターゲット文で初めて新登場人物が登場することなどが考えられる。

また、潜在条件のターゲット文は、明示的な視点表現を含んでいないので、対応・非対応反応に分類できない。そこで、潜在条件では、描かれた絵を文脈に沿った反応 (つまり、一致条件では対応反応、不一致条件では非対応反応にあたる)、他の登場人物(相手)寄りの反応、第三者寄りの視点である中立反応の3つに分類した (Fig. 3)。文脈に沿った反応の頻度は70, 他の登場人物寄りの反応は48, 中立反応は48であった。 χ^2 検定を行ったところ、有意傾向が認められた ($\chi^2 = 5.83, df = 2, p < .10$)。文脈に沿った反応は、他の登場人物寄りの反応や中立反応よりも多いことがわかった。したがって、文章の視点が明示されていない文章でも、文脈の影響が示唆された。しかし、文章の視点を明確に示さない潜在条件の文章では、第三者的な視点をとる被験者が、一致・不一致条件におけるパターンに比べて比較的多い。

Table 3 イメージの視点取得の個人内の一貫性の割合

	一郎寄りの視点	玄太寄りの視点	山んば寄りの視点	中立反応*	文脈対応の視点	一貫性無し
一致条件	12.9%	22.6	6.5	3.2	29.0	25.8
不一致条件	16.7	26.7	0.0	3.3	16.7	36.7
潜在条件	12.9	9.7	3.2	12.9	3.2	58.1

* 中立反応とは第三者寄りの視点をとる反応のことである。

個人差について 次に、イメージの視点の個人内の一貫性を検討する。その際に、物語理解においてターゲット文の文章の視点よりも、それまでの文脈の視点の方がイメージの視点に影響を与えることが示唆されたので、以下ではイメージの視点と文脈の視点の関係から個人差を検討する。

イメージの視点取得についての個人的なパターンは、大きく分けて文脈の視点の変化に伴って、イメージの視点を柔軟に変化させるタイプ、1人の登場人物にイメージの視点を固定させているタイプ、第三者的な位置にイメージの視点を固定させているタイプ、一貫性が認められないタイプの4つに分類できる。これらの分類の基準は、次の通りである。

まず、6シーン中4シーン以上で文脈の視点とイメージの視点とが適合している反応パターンを持つ被験者をイメージの視点を「文脈に沿って柔軟に変化させるタイプ」とした。

次に、1人の登場人物は物語中4シーン登場するので、その3シーン以上において、同じ登場人物寄りにイメージの視点をとる反応パターンを持つ被験者を1人の登場人物にイメージの視点を固定させているタイプとした。このタイプには、「一郎寄りのイメージの視点に固定するタイプ」、「玄太寄りのイメージの視点に固定するタイプ」、「山んば寄りのイメージの視点に固定するタイプ」に分類できる。文脈の視点は、6シーン中4シーンが玄太に置かれているので、文脈に沿って柔軟に変化させるタイプと玄太寄りのイメージの視点に固定するタイプの区別が曖昧になる場合がある。その際は、残り2シーン中1シーン以上が文脈の視点に一致している場合は文脈に沿って柔軟に変化させるタイプに分類した。

そして、6シーン中4シーン以上で第三者的なイメージの視点をとっている被験者を「第三者的なイメージの視点に固定しているタイプ」とした。

最後に、これら上記の分類に入らない反応を持つ被験者を「一貫性が認められないタイプ」とした。

以上のような基準に沿って、各被験者の反応タイプを条件別に分類した結果をTable 3に示した。文脈の視点の変化にともないイメージの視点を柔軟に変

化させるタイプは、一致条件が最も多く、潜在条件が最も少ない。これは、一致条件だけが文脈の視点とターゲット文の文章の視点と一致していたために、それに合わせたイメージの視点を取りやすかったものと思われる。また、一致条件と不一致条件において第三者的なイメージの視点に固定させる被験者が少ない。一方、潜在条件では第三者的なイメージの視点に固定する被験者が他の2条件に比べて多い。これは、一致・不一致条件のターゲット文が視点を明示的に示しているため、第三者的な視点をとることが困難であったためと考えられる。次に、全条件において山んば寄りの視点を一貫してとるタイプは少ない。これは、ターゲット文になって初めて山んばが登場するシーンがあったことや、山んばの敵役としてのキャラクターが山んば寄りのイメージの視点をとりにくくしていたためと思われる。さらに、一貫していないタイプは、一致条件、不一致条件、潜在条件の順で多くなっている。これは、潜在条件では、ターゲット文によるイメージの視点への影響があまり強くないので、一貫した結果が得られなかったのであろう。

以上のことから、物語を読む際に喚起されるイメージの視点と物語中の文章の視点は、必ずしも一義的に対応しているわけではないことが示唆された。ターゲット文の文章の視点だけでなく、それまでに構築されてきた連続的なイメージを規定している視点にイメージの視点は影響されていると考えられる。また、文章の視点だけでなく、イメージの視点の設定の仕方には個人差があることも示唆された。その個人差は文章の視点や文脈の視点と相互に関係していると考えられる。今後、物語中のイメージの視点と文章の視点の関係を明確にするためには、文章の視点、文脈の視点だけでなく個人内の一貫性との交互作用も考慮しなければならないであろう。

引用文献

- 天野 清・田島啓子 1980 空間概念の形成に関する実験的研究 教育心理学研究, 28, 80-90.

- Black, J.T., Turner, T.J., & Bower, G.H. 1979 Point of view in narrative comprehension, memory, and production. *Journal of verbal learning and verbal behavior*, 18, 187-198.
- Borke, H. 1971 Inter-personal perception of young children: Egocentrism or empathy? *Developmental Psychology*, 5, 263-269.
- Fishbein, H., Lewis, S., & Keiffer, K. 1972 Children's understanding of spatial relations: coordination of perspectives. *Developmental Psychology*, 7, 21-33.
- Flavell, J.H. 1978 The development of knowledge about visual perception. In C.B. Keasey (ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*. Uni. of Nebraska Press, Pp. 43-76.
- 福田由紀 印刷中 明示的視点表現を含む物語の理解と視点操作能力との関係 *教育心理学研究*, 38
- 石黒広昭 1985 日本語児における授受動詞構文理解の発達の研究—格と視点— *心理学研究*, 56, 192-199.
- 久野 暉 1978 談話の文法 大修館
- 久慈洋子・斉藤こずゑ 1983 視点の変換を要する動詞の獲得順序について 日本心理学会第47回総会発表論文集, 323.
- Light, P. 1983 Piaget and egocentrism: A perspective on recent developmental research. *Early Child Development and Care*, 12, 7-18.
- Masangkay, Z.S., McCluskey, K.A., McIntyre, C. M., Sims-Knight, J., Vaughn, B.E., & Flavell, J. H. 1974 The early development of inferences about the visual percepts of others. *Child Development*, 45, 357-366.
- 宮崎清孝 1985 文学の理解と視点—認知心理学の立場から— *日本語学*, 4, 41-50.
- 無藤 隆・久保ゆかり 1982 社会的認知 無藤隆 (編) *ピアジェ派心理学の発展 I—言語・社会・文化—* 国土社 Pp. 59-98.
- 中塚みゆき 1979 位置関係の変換に関する発達の研究 *教育心理学研究*, 27, 1-9.
- 鈴木情一 1981a 視点の言語心理学的研究—文の述部に焦点をおいて— *読書科学*, 25, 20-31.
- 鈴木情一 1981b 視点の言語心理学的研究—直接話法における視点の移行について— *読書科学*, 25, 96-107.
- 鈴木情一 1982 視点の言語心理学的研究(3)—主観述語における指示条件に焦点をおいて— *読書科学*, 26, 10-23.
- 渡部雅之 1984 幼児の位置関係の変換に関する発達の研究 *教育心理学研究*, 32, 60-63.
- 山田 純 1985 文における視点 *日本語学*, 4, 32-40.
- 安井 泉 1976 「あげる」, 「くれる」と「ダイクシス再編成」, *新英文科手帖* 6, 2-11.
- 弓野憲一 1981 対数—線型モデルによる質的データの解析とそのためのBASICプログラム 静岡大学教育学部研究報告 (自然科学編), 32, 189-215.